

養護施設職員が抱える青少年の性行動への対応に関する苦手意識について

- 援助交際についてのグループインタビューを元に -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
赤田 知華子

児童養護施設の職員は、入所児童が援助交際をすることに対して、戸惑いを感じている。本研究の目的は、職員が援助交際について語る時に、どのような葛藤や心理的プロセスを辿る中で、戸惑いや悩みが表明されるのかを検討し、職員の感じる戸惑いはなぜ起こるのか、職員がどのような点に留意することでこれらの問題に向き合っているのか、検討すべき現実的課題を見いだすことである。そこで著者は、養護施設職員にグループ・インタビューを実施し、それをグループ・インタビュー法で分析した。その結果、以下のことがわかった。第1に、1990年代後半に中高生だった、現在20代・30代である女性は、援助交際に巻き込まれた世代である、ということである。1990年代後半は、援助交際という言葉が、それまでの性風俗の世界における愛人契約を指す言葉から、一般の女子中高生が金品と引き換えに性的行動を行うことを指す言葉に変化し、社会現象として広く世間に認知され始めた時期である。当時女子中高生という立場であった彼女らにとって、同じクラス内に当事者がいたことや、マスメディアの影響もあり、援助交際は完全に自分に関係のない世界の話ではないと言い切ることができなかった、つまり何らかの形で援助交際に巻き込まれた経験が、現在の入所児童の援助交際に対して感じる戸惑いに関与しているのではないだろうか。第2に、養護施設の中で、援助交際の心理的要因とされている虐待経験や家族の問題について考えると無力感を感じる、ということである。近年、児童虐待による入所の増加、入所理由の多重化、入所児童が持つ事情の多様化などにより、職員は多くのストレスを感じている。入所児童の、援助交際という行動の原因が、そのような背景や家庭の事情にあるとしても、そこに注目すると無力感を感じて辛くなってしまう。その苦痛を回避するため、入所児童の心情を想像し語り続けることを回避したのではないか。第3に、日本の性教育の混乱が表しているように、そもそも大人が子どもの性に対し、どのような態度を示せば良いのかが定まってない、ということである。性教育は今、正確な科学知識と自分に有利な選択をできる能力を身につけさせようという包括的性教育推進論、それとは対極にある性道徳に重点を置いた純潔教育推進論、教えることで逆に興味を持ってしまいうのでむしろ教えない方が良好とする不要論・有害論まで存在する。そして近年の保守的な性規範教育の台頭は、性教育現場をさらに混乱させている。そのことは同時に、援助者の青少年の性行動に対する態度も混乱させているのではないだろうか。援助者の援助交際についての混乱に、以上の3点が関与していることが示唆された。